

# 中国古代の旅と巡礼

藤田 勝久

## はじめに

中国古代の旅と巡礼には、いくつかのケースが想定される。

第1は、中国各地の聖地へ旅をする場合である。秦漢時代では、秦の始皇帝と漢の武帝が泰山<sup>たいざん</sup>でおこなった封禪<sup>ほうぜん</sup>（天子の祭祀）をはじめ、各地の山川祭祀を行う巡行（巡狩）が有名であり、武帝のときには司馬遷も随行した<sup>1)</sup>。その後も唐代では、皇帝の巡行のほかに、李白や杜甫たちが各地の名所に旅をした例がある。こうした皇帝から官吏、一般庶民までの旅と巡礼は、どのように変遷しているかが問題となる。

第2は、中国人がインドなどの聖地へ巡礼する場合で、法顕<sup>ほっけん</sup>や、唐代の玄奘<sup>げんじょう</sup>などが有名である。第3は、日本人が中国の聖地を巡礼するケースで、とくに平安時代（中国の唐・宋時代）の僧侶たちの五臺山、天台山などの巡礼が知られている。これはまた、中国の交通と旅の事情を知る手がかりとなる。

ここでは、第1の秦漢時代の交通と旅行について概略を述べ、つぎに2002年9月の江南巡礼史跡の訪問をふまえて、中国の旅との接点を展望してみたいとおもう。

## 1、皇帝の巡行と泰山

中国古代では、天子が各地を巡行するという伝えがあり、それを実行したのは秦始皇帝が最初である。その目的は、国見とする説や、軍事的なデモンストレーション、祭祀儀礼、不老不死の願望など、さまざまな要素が指摘されている<sup>2)</sup>。しかし始皇帝の巡行した地をみると、それは秦の五岳（泰山、華山、嵩山、会稽山、湘山）がふくまれている。また漢の武帝のときには、五岳（泰山、華山、嵩山、天柱山、恒山）が変わっているから、共通するのは泰山と華山、嵩山で、南方の会稽山などの認識が変化したことがわかる。

このうち山東省の泰山（海拔1545m）は、古代から祭祀と山岳信仰の対象であった。司馬遷が著した『史記』封禪書には、『書経』舜典を引いて、伝説の舜<sup>しゅん</sup>という帝王が五嶽（泰山、衡山、華山、恒山、嵩高山）を巡ったといい、その一つが泰山であった。その後、泰山をふくめて五嶽を巡行した伝えはあるが、その実態は不明である。それを不老不死の神仙思想と関連して祭祀を実行したのが始皇帝といわれる。また漢の武帝も、泰山で封禪の儀式をおこなった。これは秦・漢時代の皇帝儀礼として、名山の信仰がみえた例である。しかし始皇帝や漢の武帝が天子の封禪を行なうと、それは地方の信仰対象から、広く全国に知られる信仰の対象となった。その後、後漢時代、唐代、北宋時代にも皇帝の封禪は行われた。

これに対して泰山の巡礼は、地方の山岳信仰から、泰山の神（東嶽大帝<sup>とうがくだいてい</sup>）を祭るように変化している<sup>3)</sup>。また北宋の真宗が封禪した時（1008年）に、道教の碧霞元君<sup>へきかげんくん</sup>の廟を創建し、ここから明代に信仰が盛んとなった。毎年、正月～4月に人々が大挙して押し寄せ、眼病や子授けなどを願うほか、幸福を祈願する信仰が今日にいたるまでつづいている。このように山東省の泰山は、皇帝から庶民にいたるまで、様々な信仰と多くの史跡を残しているため、今日では「世界遺産・東嶽泰山」とされている。

それでは皇帝の巡行に対して、官僚や官吏たちや一般庶民の旅は、どのようなものだったのだろうか。

これについては、つぎのような特徴がある<sup>4)</sup>。

漢代では、地方長官の赴任や、官吏の公用出張、使者の往来には、公的な宿場や乗り物を利用することができ、食物も支給された。これを示すのが、「伝」という身分証明書の発行である<sup>5)</sup>。また軍隊の派遣や、従軍による労働、地方の労役なども公的な旅行である。しかし一般には、商業にとまなう物資の輸送や、客となって貴人や官僚に寄食したり、逃亡や流民となる場合はみえるが、長期的に庶民が旅行することは困難であったとおもわれる。したがって中国古代では、庶民が巡礼のような形で、遠くの聖地に赴くという旅行は確認することができない。

それでは中国では、いつ頃から広く一般に庶民の旅行が広がるようになるのだろうか。つぎに江南巡礼の史跡を訪れたときの様子をもとに、この問題に関する手がかりを得ることにしよう。

## 2、江南巡礼の史跡と交通路

最初にみたように、中国の巡礼には日本人が聖地を訪れるケースがある。たとえば中国への渡航では、遣唐使の往来が有名であり、その概略とルートは森克己『遣唐使』（1966年）などによって知ることができる<sup>6)</sup>。そのうち江南の史跡にかかわるのは、とくに南路を通るようになってからで、つぎのような人物が関連している。

中国では、揚州の大明寺にいた鑑真（688～763）が、日本への渡航を試み、5度の失敗のあと、753年に日本に來ている。また第16回の遣唐使では、天平勝宝5年（753、唐玄宗、天宝12年）に、最澄（767～822）と空海（774～835）が中国を訪れた。最澄は、延暦22（803、唐徳宗）から翌年まで入唐し、天台山に行っている。空海は、最澄と同時期に入唐し、長安で修学したあと、大同1年（806、唐憲宗、元和1年）に帰国した。その通過地には、杭州、揚州などがある。

遣唐使が廃止されるまえ、最後の838年に渡航した人物に、円仁（794～864、慈覚大師）がいる。円仁は、長江の河口に漂着し、揚州から山東をへて、五臺山、長安、洛陽などを訪問し、最後は山東から帰国した。その旅行記『入唐求法巡礼行記』は、承和5年（838）6月13日～847年までの日記で、唐代の旅行と社会を知る資料として注目されている<sup>7)</sup>。そのあと中国旅行記を残した人物に、円珍（814～91、智証大師）がおり、853～58年（宣宗の時代）に入唐して、旅行記『行歷抄』を残した。成尋（1011～1081、善慧大師）は、延久4年（1072、宋熙寧5年）3月19日～延久5年（1073、宋熙寧6年）6月8日まで『参天台五臺山記』を残した<sup>8)</sup>。そこでは杭州から天台山を訪問し、杭州から開封、五臺山、開封から杭州、明州まで行く旅行を記している。この円仁と成尋の旅行記は、中国の史書にみられない社会の情報をふくむ資料として注目されている。

愛媛大学のメンバー（松原弘宣、若江賢三、藤田勝久、高橋弘臣、加藤国安の5名）は、2002年9月11日～18日まで、こうした日本の僧侶たちが訪れた史跡を訪問し、とくに私は交通路と旅行の形態について考察した。その日程は、つぎのとおりである。

9月11日（水）、松山から関西空港をへて上海に到着。上海泊。12日（木）に上海から車で杭州に行き、古運河と西湖、浙江省博物館を参観。博物館は新石器時代からの文物のほかに、近代の小舟が展示されていた。杭州泊。13日（金）は、杭州から紹興を訪れた。ここには秦始皇帝と司馬遷が訪れた禹陵と会稽山があるが、このときは蘭亭と、春秋時代の印山越王陵の博物館を見学した。また紹興博物館では文物と禹陵・鑑湖などのパネル展示をみて、あとで公園となっている東湖に行き、浙東運河に船が往来する様子を見た。午後は寧波<sup>ニンポー</sup>に行き、天童寺（道元ゆかりの寺）、阿育王寺を参観。見学を終えると、すでに夕闇で、寧波泊。14日（土）は、寧波から天台山に向かう。今は高速道路が通っており、かつての交通路ではないが、しだい

にカーブの多い山道にさしかかると、ふと京都の比叡山を連想する。ここでは天台県を通過して、雨のなかを国清寺と石梁瀑布、華頂講寺などを見学して、天台山泊。15日（日）は、天台山から紹興の方面へでて杭州へ戻る。このルートは、方向は反対であるが、成尋が国清寺に行く路線であり、運河から河川、陸路に乗り換える地形がよくわかり興味深かった。また紹興に近づくあたりから杭州に向かう方面は、まさに水郷の景観で、その集落の真ん中には必ず水路が貫通しているのを確認できた。この日は杭州で昼食をすませたあと、列車で南京に行き、南京泊。

9月16日（月）、南京からバスで揚州に行き、1日ほど市内を参観する<sup>9)</sup>。ここでは古運河の一部という瘦西湖公園を参観し、遊覧船や音楽を演奏する舟を見たあと、大明寺（鑑真紀念堂）に行く。つぎに唐宋揚州故城と揚州博物館では、発掘された運河を通行する舟や、城郭の磚（レンガ）が展示されていた。そのあと大運河を建造した隋の煬帝陵（伝承）と、古運河（邗溝）、今の京杭大運河を参観し、その壮大な水運の継承を実感した。この日も南京泊。17日（火）、午前に南京博物院を訪れ、分類された展示物を参観する。午後、南京から列車で上海に戻り、上海泊。18日（水）、上海から関西空港をへて松山に帰る。

### 3、中国の旅と巡礼について

以上の訪問をふまえ、中国古代の旅と巡礼について簡単な感想を述べておきたい。

(1) は、名山の認識と交通路との関係について。始皇帝が江南に巡行する前、『書経』禹貢篇や『史記』夏本紀に禹が治めた九州を伝えているが、その揚州には会稽山を記していない。もしこれらの資料が作成された当時、禹が会稽山で亡くなったという伝えがあれば、その地理知識に加えたであろう。また近年、上海博物館が購入した戦国楚簡《容成氏》には古代の帝王伝説を記し、そこに禹貢篇とは違って、やや山東の情報が豊富な九州説を載せながら、やはり会稽山を記していない<sup>10)</sup>。ただし秦王（のちの始皇帝）を補佐した呂不韋が編纂したという『呂氏春秋』有始覧には、揚州の九山に会稽山がある。とすれば始皇帝の巡行は、戦国末までの伝えにもとづくのかもしれない。

また会稽山と天台山までの交通路を比べてみると、始皇帝の巡行ルートとの関係がよくわかる。たとえば成尋『参天台五臺山記』では、杭州から紹興、剡（嵊州）、新昌をへて天台県へ行くルートに、水陸の切り替えを示している<sup>11)</sup>。

5月4日、杭州—各水門。5日、各水門—錢塘江—西興泊。6日、水門—山陰県（紹興）。7日、水門—東関—曹娥堰。8日、曹娥河～。9日、三界県の手前で大船から小舟に乗り換え。10日、～剡県（嵊州）。11日、剡県、輶（やまかご）に乗り換え—新昌県。12日、新昌県と天台県の境。13日、天台山の国清寺に到着。

これによると成尋の一行は、つぎのように旅している。

①一般運河の船→②小型の舟に乗り換え→③徒歩に切り替え→④天台山へ  
（運河と河川） （小河川） （谷間の道路）

そこで始皇帝と司馬遷の旅行をふりかえると、揚州から蘇州、杭州、紹興までは水郷の景観が共通しており、同じ船で移動ができる。しかし紹興から先の寧波へは、後世に開鑿された浙東運河がなく<sup>12)</sup>、天台山に行くには交通手段の変更が必要である。つまり秦漢時代では、同じ水路による手段で行った南方の終点が紹興の会稽山だったことになる。これは地理知識の拡大とともに、交通路のあり方として興味深い。

後漢時代より以降になると、会稽山よりも南方の天台山と黄山が仏教と道教の聖地として有名になる<sup>13)</sup>。これは北方でも西晋末より以降に、恒山から五臺山（標高3058m）のほうが有名になることとよく似ており、宗教の違いとともに、名山はより高く、より遠くという傾向になっている。

(2)は、水陸の関所・津と宿泊、飲食などの問題である。漢代では、官僚や使者、官吏などの往来には「伝」が必要であり、一般庶民は商業、流民にも制限があり、自由に旅行することはできなかった。これは唐代でも同じで、往来には「過所」という身分証明書が必要で、基本的には本籍地を自由に離れることはできなかったといわれる<sup>14)</sup>。しかしまた公用旅行で宿舍や食料が提供されるとしても、一般の旅行では、どのようにして食料や飲み物を確保したのかという問題がある。いま『参天台五臺山記』をみると、成尋たちは食料を自給しながら旅をすすめている。したがって水陸の旅行では、どのような交通手段で関所や津を通過するか、あるいは宿泊の手配と飲食などの供給も大切な問題であることがわかる。

(3)は、漢代以降にみられる各地の旅行と往来を、どのように理解するかということである。漢代から三国、魏晋南北朝、隋・唐時代までには、同じように公的な旅行や軍事的な行動があったはずである。そこで問題となるのは、私的な往来のあり方と、聖地などに変化がみえるかということである。私的な旅行では、魏晋南北朝から各地の名所を詠んだ漢詩がふえており、唐代には李白(701~62)と杜甫(712~70)の旅が有名である<sup>15)</sup>。また漢代にはみられなかった道教や仏教の寺院と聖地がふえてゆき、唐代では日本人僧侶のほかに、中国の僧侶や道士の巡礼などがみえている。これらの特徴は、のちに一般庶民の旅が広がることにつながってゆくのであろう。

このように中国の交通と人びとの移動・往来をみると、各時代の旅行のあり方は、宗教的な巡礼の問題だけではなく、当時の社会と文化にかかわる重要なテーマであることがわかる。今後は、秦漢時代から隋唐時代までをみすえて、水陸の交通路を利用した人々の往来の歴史的な意義や、旅行の形態に関する考察をつづけたいとおもう。

## おわりに

中国の史料に「巡礼」という言葉がみえるのは、唐代からといわれる<sup>16)</sup>。また宋代には、聖地や寺院を巡る行為や、寺院に学業を受けにゆくことに規定が設けられていたという。したがって唐代以前に、僧侶たちや庶民の巡礼は、ほとんどみられないことになる。

しかし中国古代の旅としてみれば、皇帝から官僚、使者、官吏、軍隊、労役の公的な旅行をはじめ、商業や、寄食、逃亡、流民にいたるまで、さまざまな往来がみられた。また仏教や道教の巡礼ではないとしても、名山などへの信仰がある。本稿では、こうした唐代以前までの交通と旅のあり方を概観してみた。

なお最後に、中国の旅行記について少しふれておきたい。中国では、北魏の酈道元『水経注』のように、現地の踏査をふまえた地理書が残されているが、これは旅行記ではない。有名な旅行記では、南宋・陸游『入蜀記』(平凡社東洋文庫に訳注がある)、南宋・范成大『呉船録』(平凡社東洋文庫に訳注)などがあるが、これらは官僚として四川に赴任したり、任地から帰郷するときの見聞である。また明代になると、徐宏祖(江蘇省江陰県の人、1586~1641)の『徐霞客遊記』という大部な旅行記が現れている。ここには五臺山、天台山、黄山をはじめ、今の湖南、広西、貴州、雲南省にいたる幅広い旅行が記されており、また地理書としての価値も高いといわれる。

こうした状況を見ると、唐代から官僚や僧侶たちの往来に詩文がふえることに加えて、宋代には、官僚として赴任あるいは帰郷するときの見聞記が残され、明清時代になると、さかんに庶民の旅行記が著されるようになる。これらの旅行記の一部は集成されており、その歴史的な概略をうかがうことができる<sup>17)</sup>。だから唐代より以前では、『水経注』に代表される地理書をふくめ、各地の交通と人びとの往来を再検討することが大切であり、とくに中国東部の旅と人びとの往来は、東アジアの日本との交流を位置づけるためにも重要なテーマとなる。

## 注

- 1) その概略は、金子修一『古代中国と皇帝祭祀』（汲古書院、2001年）、藤田勝久『司馬遷とその時代』（東京大学出版会、2001年）、同『司馬遷の旅』（中央公論新社、2003年）など。
- 2) 稲葉一郎「秦始皇の巡狩と刻石」（『書論』25、1989年）、鶴間和幸『秦の始皇帝』（吉川弘文館、2001年）、桐本東太『中国古代の民族と文化』第2部第1章「不死の探究」、第2章「始皇帝の第一回巡狩と封禅」（刀水書房、2004年）など。
- 3) シャヴァンヌ著、菊池章太訳『泰山 — 中国人の信仰』（勉誠出版、2001年）には、清朝末期（1907年）の調査旅行の写真と解説がある。藤田勝久「中国古代の交通と祭祀 — 泰山の信仰」（『四国遍路と世界の巡礼』愛媛大学法文学部、2001年）。
- 4) 藤田前掲『司馬遷の旅』余論「漢代の旅行事情」で、簡単に紹介している。
- 5) 大庭脩「漢代の関所とパスポート」（『秦漢法制史の研究』創文社、1982年）など。
- 6) 森克己『遣唐使』日本歴史新書（至文堂、1966年）など。
- 7) 円仁、足立喜六訳注、塩入良道補注『入唐求法巡礼行記』1、2（平凡社東洋文庫、1970、1985年）、E.O.ライシャワー、田村完誓訳『円仁 — 唐代中国への旅』（1984、講談社学術文庫、1999年）など。
- 8) 平林文雄『参天台五臺山記校本並に研究』（風間書房、1978年）、伊井春樹『成尋の入宋とその生涯』（吉川弘文館、1996年）など。
- 9) 揚州の地理は、愛宕元「唐代の揚州城とその郊区」（『唐代地域社会史研究』同朋舎出版、1997年）に考察がある。
- 10) 馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（二）』（上海古籍出版社、2002年）。陳偉「禹之九州与武王伐商的路线」（『報告集Ⅱ（2003年度）』早稲田大学21世紀COEプログラム：アジア地域文化エンハンシング研究センター、2004年）など。
- 11) 天台山から杭州に帰るときは、この反対のルートになっている。
- 12) 江南の古運河調査は、中国唐史学会唐宋運河考察隊『唐宋運河考察記』（人文叢刊8輯、1985年）、唐宋運河考察隊編『運河訪古』（上海人民出版社、1986年）があり、後者には陳橋駅「浙東運河的変遷」の考察がある。
- 13) 現地の状況は、斎藤忠『中国天台山諸寺院の研究 — 日本僧侶の足跡を訪ねて』（第一書房、1998年）に詳しく紹介されている。
- 14) 唐代の交通は、青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（吉川弘文館、1963年）、荒川正晴「唐朝の交通システム」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』40、2000年）などに考察がある。
- 15) 名山などとの関連は加藤国安氏の報告による。
- 16) 石川重雄「巡礼者の道と宿 — 伝統中国の巡礼」（『しにか』1993年9月号）。
- 17) 倪志雲・鄭訓佐・張聖浩主編『中国歴代游記精華全編』上下（河北教育出版社、1996年）は、地域別に旅行記を集成している。その時代は、古くは慧遠（東晋）「廬山記」、袁嵩（東晋）「西陵峽」より以降から、わずかに北魏、梁、唐、宋、金、元代の記述もあるが、圧倒的に明・清時代の旅行記が多い。たとえば山東の泰山に関する旅行記には、以下のようなものがある。

宋・邵伯温「泰山録」、明・王世貞「游太山記」、明・謝肇淛「登岱記」、明・呉同春「登泰山記」「続游泰山記」、明・鐘宗淳「泰山紀游」、明・史彪古「岱游記」、明・姚奎「游石屋記」、清・余縉「登岱記」、清・孔貞瑄「泰山紀勝」、清・沈彤「登泰山記」、清・姚鼐「登泰山記」、清・呉錫麒「游泰山記」